

私の西部旅行

武田 むつみ

1983年9月10日、ワシントン D.C. 郊外の空港からコロラド州デンバーへ向かって飛び立った。2度目の西部旅行はデンバーで車を借りて、コロラド、ユタ、アリゾナ、ニューメキシコ各州の9つの国立公園をまわる計画であった。「アラビアのロレンス」の影響以来か、私は乾燥地域に特別な興味と憧れを持っており、アメリカ滞在中に西部を訪ねることが念願だった。デンバーの西、海拔4,000mをこえる山々の連なるロッキー山脈国立公園から西へ大陸分水界を越え、ユタへ向かって車を進めると、「砂漠」という言葉がふさわしい乾燥地域へはいり、アーチ、ブライスカニオン、ザイオン等の国立公園を見学しながらグランドキャニオンへ、それからさらに南下してフェニックス、オルガンパイプカクタス、ツーソンをまわり、ペトリファイドフォレスト、メサヴェルデの国立公園、モニュメントヴァレーからサンタフェにぬける2週間、6500キロの旅は、自然の大きさに圧倒され、毎日が興奮の連続だった。

ユタ州にはいり、乏しいガソリンを気にしながら、丈の低い灌木のはえた砂漠地帯を走ると、次第に赤い岩壁が迫ってくる。アーチ国立公園の入口から一気にその崖を上ると、自然の造った様々な形の砂岩が砂漠の中に現れた。柱状のもの、板状のもの、微妙なバランスを保っているもの、見事なアーチになったもの、なりかけのもの等々、厚さ1,500mをこえる砂岩層が地殻運動に加えて著しい気温差、風等の営力により侵食された結果と頭の中では理解できても、眼にするものはあまりに規模が大きく精巧で、その昔先住民族が造ったのでは、と夢が広がってしまう。ここ最大のランドスケープアーチ（高さ32m、両端の距離89m）へのハイキングは巨大な赤い板状の砂岩の間に行くもので、不思議の国へ迷いこんだような気分させられた。このような雄大な自然の造形

の妙は行く先々で見られたが、やはりとどめはグランドキャニオンであろう。その形成過程を示す各地層の見事なこと！1,600m下を白く波立ちながら流れるコロラド川が、20億年の昔からこのカイバブ台地を刻んできた歴史に思いを馳せると、時の経つのを忘れてしまう程飽かず眺め入った。こんな所で地質学、地形学の勉強をしたら、だれでも興味を持つに違いないだろう。

植生の希薄な乾燥地域は自然が大地に直接その影響を及ぼす所と実感したのは、メキシコとの国境付近に広がるオルガンパイプカクタスを見に出かけた時だった。急に氷粒混じりの雷雨に見舞われ、やりすごした後の帰り道、道路のあちこちが滝のように泡を立てて流れる雨水に分断されてしまった。数時間後、水の勢いの衰えを待ってレンジャーの先導で脱出したが、すさまじい流れに直径1mもあろうかというような岩も簡単に移動させられ、そこが道路であったと到底信じられない程、形状が変わってしまっていたのには驚かされた。

旅行中、それぞれに興味深い数多くの体験をしたが、一番魅力的だったのは、とにかく見渡す限り何もない砂漠地帯を走ることだった。砂漠といっても美しい砂丘地帯は限られていて、泥、砂、小石などがゴロゴロし、小さな灌木がはえているような所が多い。まさしく荒れ果てた不毛の地だが、緑に囲まれて育ち、生活している私はそのむきだしの大地の広がりにとまらなく心ひかれた。そして、さらに印象的だったのは、そんな中に多くのインディアン居住地があることだった。ある時、スクールバスが止まり、数人の子が降りて砂山のむこうへ消えて行くのを見た。こんな厳しい土地へインディアンを追いこんだ白人に対する憤りと共に、彼らの生活、思いに触れてみたい衝動に駆られた。

(20回生)